

原著論文 (Article)

保育職養成課程におけるコロナ禍でのプレ実習

— 代替演習の実践から —

“Pre-training” in the COVID-19 pandemic in a nursery teacher education course: From the practice of alternative exercises

清 葉子*

KIYOSHI Yoko*

要 旨

日本における新型コロナウイルス感染症は2020年初頭から感染拡大し、大学教育においても2020年4月より新型コロナウイルス感染症の蔓延に配慮し多くの大学がさまざまな形態での遠隔教育を導入し授業を展開してきた。本学においても第3波の中、感染拡大防止の観点から教育学部独自科目である「ふれあい実習Ⅱ」に含まれる附属園でのプレ実習(2日間)の実施を中止し、代替演習に切り替えた。本研究は、代替演習プログラム終了後の学生のふりかえりから代替演習における学生の学習効果を計量テキスト分析(KH Coder)の手法を用いて分析した。その結果、実習記録作成後、保育者が作成した指導案を確認しながら各自気づいた点を書き込む等のワークから環境構成や保育者の援助および指導上の留意点など指導計画の立て方や子どもへの援助にはどのような意図があったか等実習記録への記載内容についてより理解を深めることができた。また、動画を視聴し各自が作成した実習記録やエピソード記録をもとに行ったグループディスカッションを通して学生が保育について語り合うことで子ども理解や保育のとらえ方の違いに気づく機会となり、学生相互の多様な視点から学びが得られた。リモートによる代替演習となったが、学生は課題への取り組みを通して経験したことやグループディスカッションに対してのおおむね満足度は高かった。動画ではあったが保育を見て記録の作成をすることで保育について考え、保育の実際について知ったり子ども理解を深めたりというプレ実習の目的は達成されたことが示された。

キーワード : コロナ禍の実習, 遠隔授業, 代替演習, 学習効果, 計量テキスト分析

Key words : practical training in the COVID-19 pandemic, remote lesson, alternative exercises, learning effects, meter text analysis

はじめに

日本における新型コロナウイルス感染症は2020年初頭から感染が拡大し始め、新型インフルエンザ等対策特別措置法(平成24年法律第31号)に基づく全都道府県に対する緊急事態宣言の発出をはじめ、感染状況に応じたまん延防止等重点措置など各自治体の感染状況に応じた対応がされてきている。大学教育においても2020年4月より新型コロナウイルス感染症の蔓延に配慮し多くの大学がさまざまな形態での遠隔教育を導入し授業を展開してきた。新型コロナウイルス感染症は2021年11月に至るまで感染拡大を繰り返しており、現在第6波が懸念されている。このように新型コロナウイルス感染症は長期にわたり国民生活に大きな影響を与え、この間大学教育においても新型コロナウイルス感染症の蔓延に配慮し引き続き対面授業と遠隔教育のハイブリット型授業など

様々な授業方法が行われている。

実習においては、厚生労働省¹⁾が2020年3月2日付の事務連絡において「新型コロナウイルス感染症の影響により実習施設の受け入れの中止等により、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。なお、これらの方法によってもなお実習施設の代替が困難である場合、実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと。」¹⁾とされ6月15日付の事務連絡には、「実習を実施できない場合は、学内での演習等に代えることで、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない。実習の日程の再調整等を行った上で、なお受け入れ先が確保できなかった場合に行うことが適当」¹⁾であるとコロナ禍の保育実習について示している。

また、幼稚園実習については文部科学省²⁾より2020年4月

* 椋山女学園大学教育学部

2022年1月18日受付

3日付で2020年度における教育実習の実施に当たっての留意事項について教育実習の実施時期、期間、内容等の調整について、5月1日付の弾力化通知により、「教育実習の科目の総授業時間数のうち、3分の1を超えない範囲を大学等における授業により行うことは差し支えないこととしているが、令和2年度に限り、教育実習の科目の総授業時間数の全部又は一部を大学等が行う授業により行うことができることとする。その際、教育実習の科目であることが前提であることから、大学等が授業を行う場合は、教育実習に相当する教育効果を有することが認められるものであり、かつ、学校教育の実際を体験的、総合的に理解できるような実習・演習等として実施すること等に努めることが強く期待されること。」²⁾とされた。のちに8月11日には、「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行が公布、施行された。令和2年度限りの特例的な取扱いとして、新型コロナウイルス感染症の影響により、大学等が令和2年度に教育実習の科目の授業を実施できないことにより、大学等に在学する学生又は科目等履修生が教育実習の科目の単位を修得できないときは、課程認定を受けた教育実習以外の科目の単位をもってあてることができることとする」²⁾という教育実習特例がだされた。このように保育者養成校における保育・幼稚園実習も新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から各養成校では実習期間および実施方法や内容について新型コロナウイルス感染症の影響により検討を余儀なくされた。

1. 保育者養成校の取り組みから

全国保育士養成協議会保育士養成研究所が行った2020年度新型コロナウイルス感染症への対応に関わる会員校の実態調査³⁾から保育実習Ⅰ（保育所）についてみると2020年7月調査は、当初の予定通り実施が67.7%であったが、本校が所属する中部ブロックは当初の予定通り46.4%であり、一部の学生の実習を延期や中止14.3%、すべての学生の実習延期や中止35.7%であった。地域の感染状況等によって実習の状況に差がみられた。新型コロナウイルス感染症の影響により学生の実習を延期や中止とされた理由は、一部の施設から受け入れ不可の意向が示された42.2%、受け入れの状況に関わらず、危機管理上の判断として養成校が決定した36.6%が主な理由であった。また、2021年1月の同様の調査⁴⁾は当初の予定で実施するという割合が45.4%と減少し、実習の延期や代替演習に切り替えがされた。保育実習Ⅰ（保育所）を代替演習で実施すると回答した養成校は28.7%であり、代替演習で実施した内容は①保育・福祉現場の映像教材の活用99校②事例による学習（事例分析、事例検討）91校④ゲストスピーカーによる講話89校⑤ロールプレイやシミュレーションといった体験学習82校などであった。代替演習の内容は、映像教材の活用、事例による学習、講話、体験型学習

といった保育の実践がわかる実践がイメージできる内容となっていた。

また、令和2年度一般社団法人全国保育士養成協議会学術研究助成課題研究「新型コロナウイルス拡散防止対応に迫られた状況下での実習運営対応に関する調査研究」研究報告書⁵⁾でも実習のスケジュール変更や実習先の変更が行われ、同様の傾向がみられた。学内演習等による代替の対応を実施した養成校は、保育所実習・幼稚園実習ともに全体の2割にとどまっていた。

各養成校においての新型コロナウイルス感染症への取り組みについては、研究や実践報告として報告されている。その内容は、代替実習のプログラム開発と実践（堀ら⁶⁾、2021；角野ら⁷⁾、2021；三好ら⁸⁾、2021；野津ら⁹⁾、2021；児玉ら¹⁰⁾、2021；川俣¹¹⁾、2021など）や実習指導の内容・授業方法について（板¹²⁾、2021；高橋ら¹³⁾、2021；三宅ら¹⁴⁾、2021など）の研究や実習への対応（志野原¹⁵⁾、2020など）についての実践報告がされている。代替プログラムは、指導計画の作成や模擬授業、現職または元職保育者による講話、教材作成教材研究などを中心に計画されていた。また、授業方法としては感染状況に応じて対面・遠隔（オンライン・オンデマンド）や複数の授業方法を組み合わせたICTを利用したハイブリット型の授業が工夫され展開されていた。

2. プレ実習（2日間）の代替演習について

2.1. プレ実習の目的と内容

ふれあい実習Ⅱは、保育ボランティアとプレ実習（2日間）からなる。プレ実習の目的は、附属幼稚園・保育園・こども園での観察および保育参加を通して、第一に幼稚園・保育園・こども園の役割や保育者の責務を理解すること。第二に保育者に求められる実践的な知識と技術の基礎を習得すること。第三に保育者としての資質や態度の基礎を身につけることである。プレ実習では、見学・観察実習と部分参加実習の実習内容を通して、保育者として求められる基礎的な力を習得する。また、園児の登園から降園まで一日の活動内容、および保育者の姿を振り返り、実習後には観察した内容を整理し子どもの様子や保育者の行動の意図や気づいた点を振り返り、実習記録を作成する。保育の観察を通して子ども理解を深め、保育者の援助・指導を学ぶとともに、担当保育者との保育カンファレンスを通し子ども理解や保育への理解を深めることをねらっている。

2.2. 代替演習について

プレ実習は、2021年2月25日～26日・3月1日～2日に計画しており、各45名ずつ2グループに分けて実施する予定であった。2月19日に感染状況と受け入れ側の意向ふまえて、プレ実習は中止とし代替演習へ切り替えることとし

た。直前ということもあり、代替演習は予定されていた日程で2回にわけ同一内容を実施することとした。

代替演習の内容は、プレ実習の目的である保育の観察を中心に①保育動画を視聴し実習記録とエピソード記録の作成②記録のふりかえりとして保育者が立案した指導計画と記録を見て保育者のねらいや意図を学ぶ③観察した内容と記録をもとにしたグループディスカッションを行うといった内容で構成した。なお、今回は参加実習の内容は含まないこととした。

使用した動画は、中止が決定してから準備した。市販のものではなく私立園へ趣旨を伝え協力が得られた園において、公開保育(筆者)および日常の保育の様子(その園の保育者)を代替実習のために撮影したものを使用した。事前に学生への注意事項として市販のものとは違い、途中画像の乱れや保育者の言葉や子どもの会話も聞きとりにくい部分あることや動画はオンデマンド(YouTube 限定配信)で視聴するため、視聴の際には園児が映っていることから、個人情報に十分に配慮し動画リンクを教えない、動画・画像を保存したり、流出させないことを固く厳守するよう求めた。

2日間ともに授業開始時は Google meet でオンラインで開始し、当日の授業説明を行った。学生がオンデマンドで受講中の担当教員のかかわり方は、学生からの質問にメール等ですぐに対応できるように待機した。質問の内容については受講生全員に共有できるように Google クラスルームストリーム等に投稿するなど学生がスムーズに課題に取り組めるように配慮した。

(1) 代替演習1日目「保育動画から学ぶ」

・動画を視聴し、実習記録・エピソード記録(場面記録)を作成する。

実習記録は、私立幼稚園での「3歳児クラス」の保育動画(約1時間)を見ながら実習記録を作成する。園内研修として行われた実践であるため、担任教諭が当日までの保育の流れや指導案が作成されており、それを課題の前後に学生へ提示した。

エピソード記録は、私立こども園の一日の生活の様子を撮影したダイジェスト(約30分間)の動画を視聴した後、6場面から1場面を選択し作成する。

当日は、Google meet で授業の趣旨と内容をオンラインで質問した後、動画の視聴は各学生のインターネット環境がさまざまであることを考慮し各自で動画をオンデマンドで視聴後、課題作成を行った。動画の視聴は、当日19時までとし、記録の提出は実習を想定して翌日9時までに Google クラスルームの各提出先へ期限までに提出を求めた。

(2) 代替演習2日目「保育を観察して学んだこと ふりかえりと学びの共有」

①グループディスカッション

当日は、Google meet でグループディスカッションの進め方や討論の柱やその他の授業内容を説明した後、グループ

ディスカッションを行った。グループは事前に教員が設定した1グループ3～4名のグループとした。ディスカッションはグループ別の Google meet で行い、グループメンバー間で実習記録とエピソード記録を共有し、動画の視聴や記録作成の際に学んだことや感想など自分の考えを発表した。各グループの様子は、筆者が順番に各グループの meet に入って発表の様子を把握した。グループディスカッション後は、グループで話し合ったことを代表者が A4用紙にまとめ、Google クラスルームのストリームへ投稿し他のグループの学びを共有できるようにした。

②実習記録のふりかえり

担当教諭の指導計画を見て、保育者の意図を読み取り、自分で作成した実習記録に赤ペンで保育者の意図を読み取りながら追記したり、自分が気づけなかった点や学んだこと記入したりすることを通して、保育者の意図等について学ぶ機会とした。赤ペンで追記した実習記録は、Google クラスルームへ提出した。

③動画の視聴

2月下旬に行われた、附属幼稚園発表会の年長クラスの動画(内容は、合奏・歌・遊戯と劇)を視聴した。

④代替演習のまとめ

各課題を通しての学びなどを Google フォームに回答した。すべての課題の最終提出日は、演習終了の2日後とした。

3. 代替演習を通した学生の学び

本研究では、代替演習の学生のふりかえりの分析の方法に樋口(2014)が開発した計量テキスト分析専用 PC 専用フリーソフトウェア「KH Coder3.Beta.04a」¹⁶⁾を用いて行った。「計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析を行う方法」¹⁶⁾である。テキストマイニング分析とも呼ばれ近年、質問紙調査等で得られた自由記述やインタビュー調査、文章を分析する手法として様々な研究分野で取り入れられている。テキストデータを単語や文節に区切り、出現の頻度や語句間の相関を可視化し、量的と質的の両側面から解析することができる。

保育の分野でも近年では、保育内容や実習等についての研究テーマの傾向を明らかにする研究：幼稚園教育要領における教育内容の歴史的変遷過程を保育内容「人間関係」の変遷の特徴について分析(三吉ら¹⁷⁾, 2021)、保育内容「環境」に関する研究論文のタイトルから研究の動向を分析(畑野ら¹⁸⁾, 2020)、インタビューの内容分析：保育者へのインタビュー調査の逐語録について分析(森ら¹⁹⁾, 2021)、保育者の絵本の読み聞かせ場面を見た協力者の発言内容から読み聞かせの特徴を分析(長屋ら²⁰⁾, 2020)、アンケートや実習後の自己評価、ふりかえりなど自由記述等の内容に焦点を当てた研究：模擬保育のふりかえりに関する自由記述から学びの

視点について分析(高橋ら²¹⁾, 2020) オンライン研修のふりかえりコメントと講座に使用した絵本の感想から研修の効果について検証(小野ら²²⁾, 2020) 保育実習生の実習園からの総合所見の記述を対象に評価の傾向を明らかにした(阿部ら²³⁾, 2020) といった研究がある。このように保育の分野でも様々な視点から計量テキスト分析の手法を用いた研究の試みがなされ、テキストデータが可視化されることから関心が高まっている。

そこで本研究でも、代替演習後に得られた学生(91名)のふりかえりの自由記述をエクセルでテキストファイル化し「KH Coder3.Beta.04a」¹⁶⁾を用いて分析する。データの使用について学生に事前に今後の授業研究に使用する旨を説明し、同意を得た。本研究で用いたテキストデータは個人が特定されないよう配慮した。データ処理の手続きについては、樋口(2014)¹⁶⁾を参考に行った。テキストデータをChaSen(茶釜)を用いて形態素分析を行い、語の取捨選択をへて前処理して得られた抽出された語の詳細な量的分析を行う。抽出語の頻出語から階層的クラスター分析や共起ネットワークから描画された共起ネットワーク図をもとに、得られたサブグラフやテキストの内容を確認し、今回の代替演習の学生の学びとその効果について検討した。

4. 結果と考察

分析には、名詞・サ変名詞・形容動詞・タグ(保育者など強制的に抽出する語と指定をした語)・形容詞・副詞を利用した。

4.1. 実習記録のふりかえりから

実習記録を作成した後に担当教諭が作成した指導計画を見ながら、自身の実習記録へ赤ペンで気づいた点や保育者の意図について書き込んだ。この課題通してどのような傾向がみられるか階層的クラスター分析を行い、似通った語を含むグループについて確認した。分析を行った結果、22単語が確認されクラスターは、5つに分類された(図1)。

各クラスターには、特徴を表すクラスター名を名付けた。クラスター1は【保育者の援助】、クラスター2は【実習記録と指導計画の比較】、クラスター3は【保育者の意図】、クラスター4は【保育・子どもを見る視点】、クラスター5は【保育を観察する視点】とした。階層的クラスター分析の結果から、【実習記録と指導計画の比較】から、【保育者の意図】や【保育者の援助】をとらえていることがわかる。また、【保育・子どもを見る視点】や【保育を観察する視点】を記録から学んだ。

4.2. 記録からの学び

学生は2種類の動画から実習記録とエピソード記録の2種

類の記録を作成した。6つの場面からエピソード記録で選択された場面は、①4歳児午前の保育:お祭り屋さんむけて(30名)、②0・1・2歳児の生活(24名)、③3歳児午前の保育:線路作り(17名)、④4歳児:登園から朝の会(14名)、⑤5歳児:帰りの会(4名)、⑥4歳児:給食(2名)であった。2種類の記録からどのようなことを学んだか記述の全体的傾向を把握するため、出現数10以上を目安に共起ネットワークの検討を行った。共起ネットワークとは、「出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだもの」¹⁶⁾である。図2には、記録の種類を外部変数とした共起ネットワークを示した。

実習記録とエピソード記録で共通していたのは保育者・子ども・行動・言葉といった観察の視点に関する語句であった。エピソード記録は、会話や表情、気持ちといった子どもの内面を読み取ろうとする語句や状況や場面といったシチュエーションをとらえようとする特徴がみられた。実習記録では、保育者の意図が特徴的であり記録はエピソード記録のほうが難しさと強い共起関係がみられた。記録は見る視点多く大変であり、実際の実習でメモを取ることが大変であると読み取れた。実習記録とエピソード記録は、学生の記録の視点の違いが明らかになった。複数の種類の記録を作成することで学生の保育や子ども理解が深まると考える。

4.3. グループディスカッションからの学び

グループディスカッションの記述の全体的傾向を把握するため、「共起ネットワーク」の検討を行った。出現回数が10以上で共起関係上位50を分析対象として共起分析を行った。図3から、学生の記述から自分という語句が中心に共起され、グループディスカッションを通してふりかえりが行われている。場面とエピソード記録と面白い、考えと子どもと保育者と意図という語句の共起が確認できることからエピソード記録や保育者の意図等に関してグループディスカッションを通して考えが深まっていく。

グループディスカッションを通して保育について語り合うことは、保育を見て感じたり考えたことを言語化したり意味付けをしたりすることができる。プレ実習中は、担当保育者と子どもや保育について保育カンファレンスが行われる。保育カンファレンスを通して子ども理解や保育をとらえる深め、保育者としての専門性を高めていくことを目的として行われる。今回は、学生同士の語り合いであったが、この学びの共有から他者の保育のとらえ方や感じ方の違いに気づき、新たな視点を得る面白さを感じていた。それは、語り合いを通して子どもや保育の見方が磨かれ、今後より多角的な視点から保育をとらえることができるようになることにも繋がっていきと考えられる。このように記録を通しての学びや気づきを仲間と振り返ることは、学びの場として有効的であった。

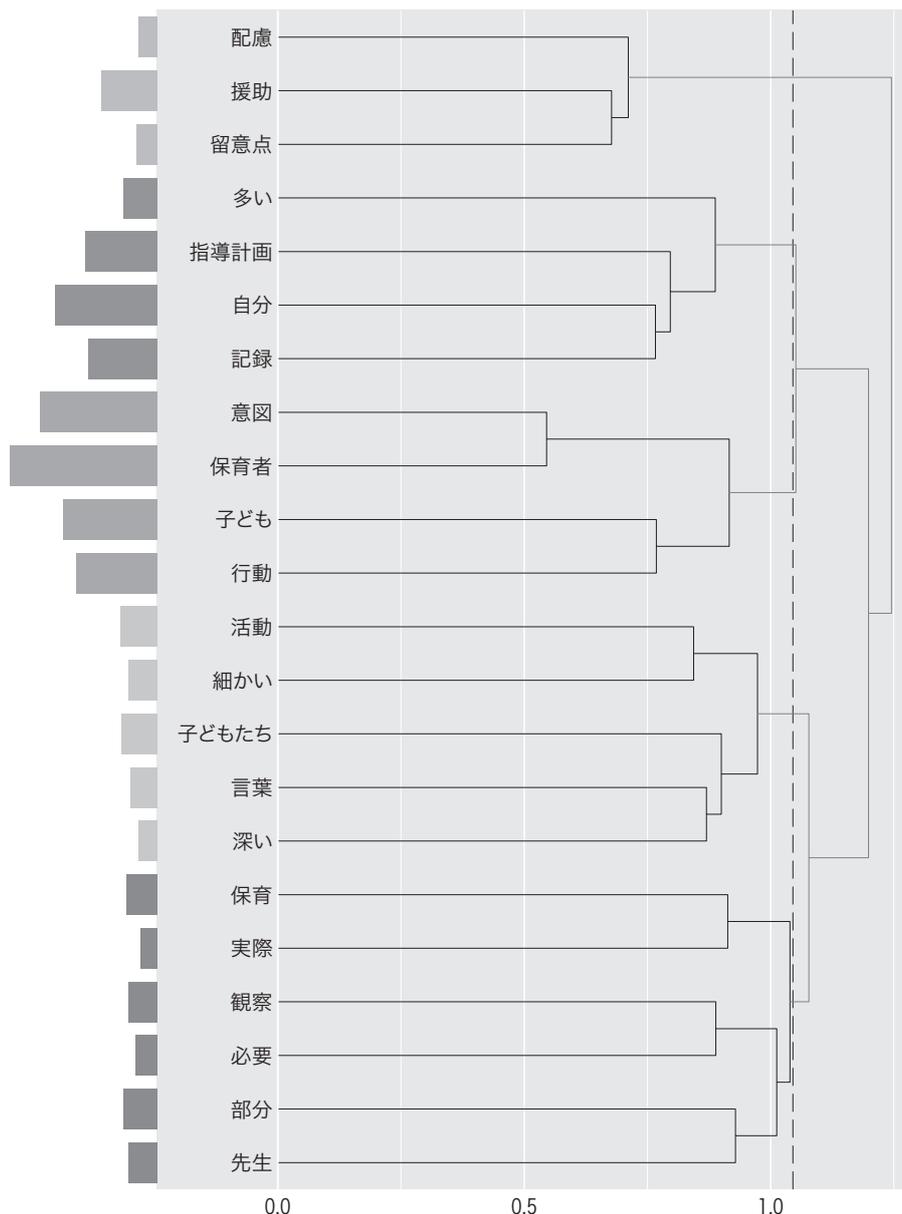


図1 実習記録のふりかえりの階層的クラスター分析

4.4. リモートでの代替演習の満足度と内容

リモートでの代替演習に変更になったことに対する学生の満足度は、満足30%、どちらかといえば満足56%、どちらかといえば不満14%であった。これらの評価別にどのようなことを学んだか記述の全体的傾向を把握するため、図4に満足度を外部変数とした共起ネットワークを示した。

共通で見られた動画・実習・リモート・観察は代替演習で行った項目である。これらを経験できたことは評価されていた。どちらかといえば不満であっても、コロナ禍で経験できたことへ評価される感想がみられた。どちらかといえば不満で挙げられた感想は動画が自分の見たい部分を見ることができなかったという教材に対する感想であった。また、プレ実習が中止となったことへの残念な気持ちや外部実習で対応できるかの不安も挙げられた。満足の回答にはグループディス

カッションが挙げられた。リモートではあるがグループディスカッションを通して学生通し学び合う機会は充実した活動となっていた。

4.5. 代替演習での学び

今回の代替演習は、自分にとってためになった86%、どちらかといえばためになった14%であり、今回の演習はおおむね学生にとって有意義な演習であった。代替演習での学んだこと共起ネットワークを用いて分析した(図5)。グループディスカッションの記述の全体的傾向を把握するため、「共起ネットワーク」の検討を行った。出現回数が10以上で共起関係上位60を分析対象として共起分析を行った。学生の代替演習に対する満足度はおおむね良好であった。

次の3つに強い共起関係がみられた。①記録の作成(実習

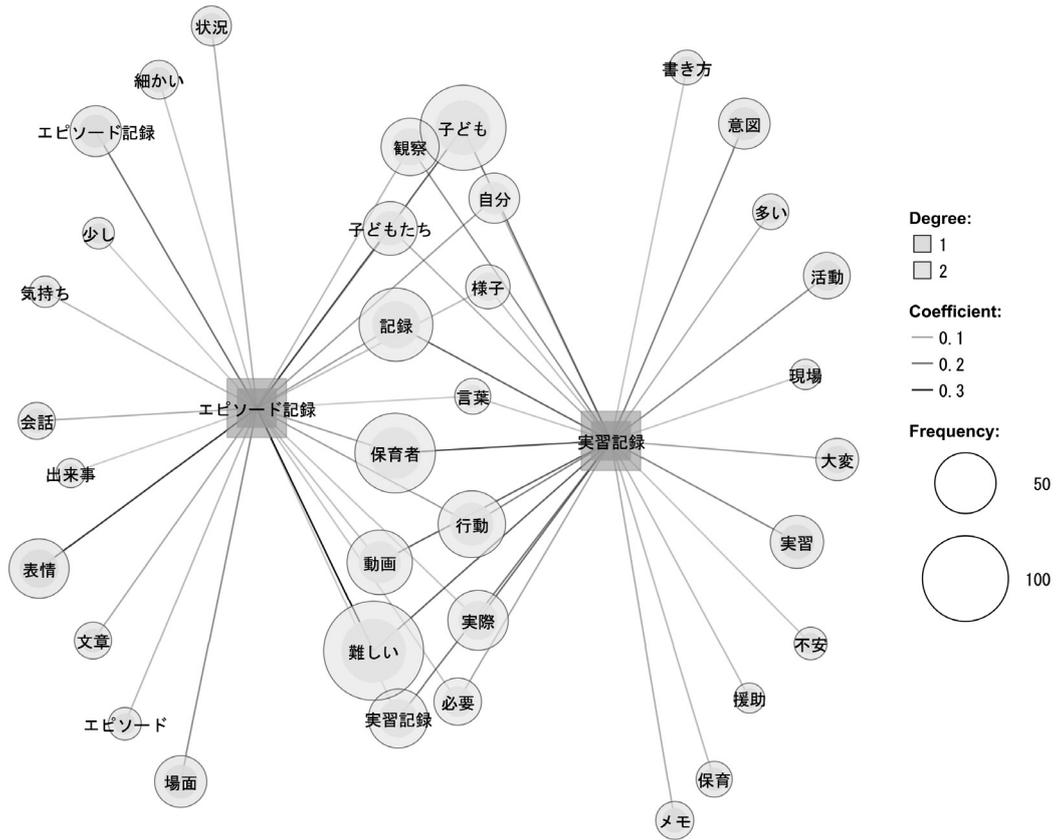


図2 共起ネットワークからみる記録別の学びの特徴

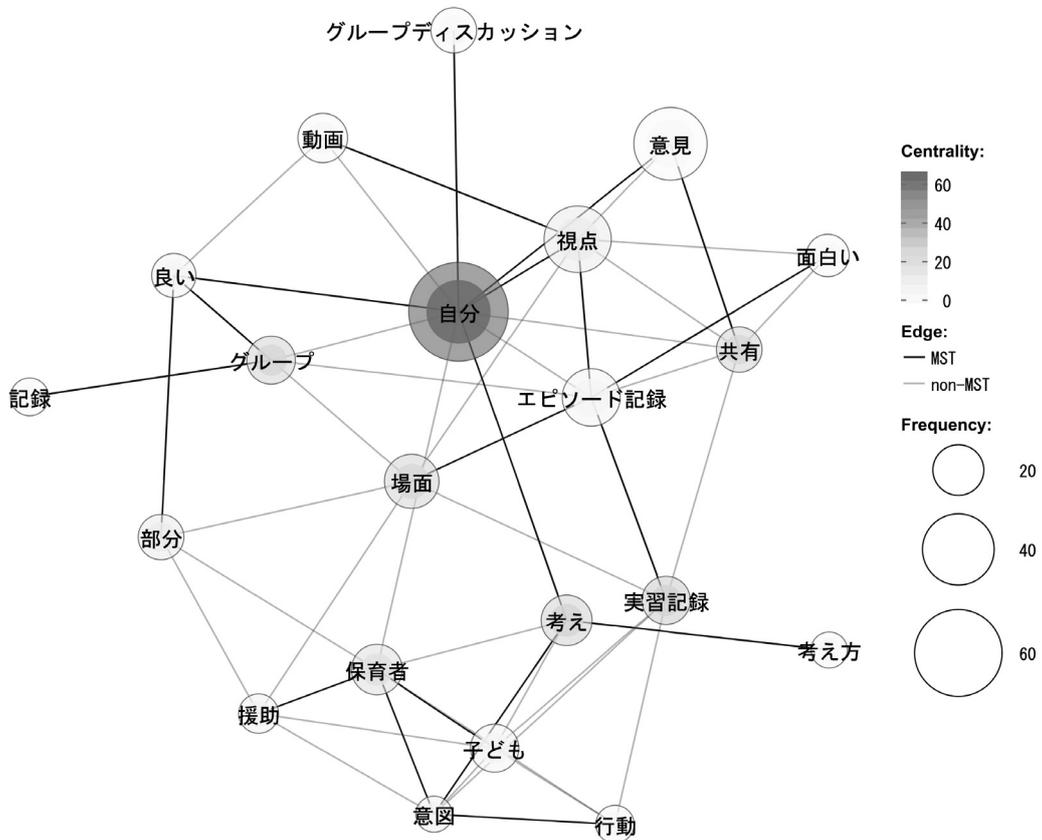


図3 共起ネットワークからみるグループディスカッションの学びの特徴

記録・エピソード記録・書き方・練習・機会・経験), ②グループディスカッション(グループ・ディスカッション・自分), ③リモート授業の内容(実習・動画・保育者・子ども・年齢)であった。これらは代替演習の内容であり, 代替演習を通してプレ実習で目指すねらいは達成し, 各演習や課題から学びを得ていたといえる。

4.6. まとめ

プレ実習の代替演習のふりかえりから, 演習を通じた学びや効果について計量テキスト分析を試みた。2021年11月にオンライン開催された2021年度全国保育士養成協議会中部ブロック第24回セミナーのテーマは「今子どもに必要なヒト・モノ・コト～with コロナ・after コロナの保育を考える」²⁴⁾であった。基調講演やシンポジウム, ブロック助成研究報告, 中央情勢報告からも, コロナ禍で保育者養成校のあり方が問われることとなったことは明らかであった。授業もICT化がすみ授業方法や内容の工夫が求められ学生の学びに必要なことや授業内容として何が必要か喚起された。また, 実習においてもこれまででは行くことが前提であったが, 状況により実習期間や内容の見直しが行われた。実習が中止となった養成校では, 代替演習の内容の検討の中で実習に行く意義や何を体験するのかといった実習に必要な経験や学びを問われ, 実習内容の構造化が図られた。2020年度は, 実習を代替演習に切り替えた養成校もあり, 各養成校で代替演習プログラムが実践された。プログラムを通じた学生の学びの検証も求められる。コロナ禍に対応しうる新たな授業研究の蓄積が必要であるとの課題が示された。

おわりに

2020年度の実習は, 本学においても新型コロナウイルス感染症の影響を受けた。緊急事態宣言発出により2020年5月下旬に実施予定であった2週間の幼稚園実習は, 緊急事態宣言明けの2020年6月から7月に1週間で実施し, 実習時期の見直しと実習期間の短縮をはかった。また, 保育所実習・施設実習においても受け入れ先の状況によって実習期間の延期などの対応をした。調整は必要であったが, 実習先のご理解もあり感染症対策を講じながら保育現場で実習が実施できた。

その後, 新型コロナウイルス感染症の感染者数は落ち着いても再度増えるような状況であり, 2020年度後期の授業は新型コロナ感染症感染拡大防止の観点からオンライン中心となり, 学生のボランティアなどは自粛とし保育を体験する機会は減少した。11月からプレ実習にむけて実習の心構えや実習記録の書き方といった事前指導を実施し準備を行い, 1月には附属園長による施設別オリエンテーションも行ったが, 中止となった。

本研究では, リモート授業による代替演習の在り方と代替演習の学習効果について「KH Coder3.Beta.04a」を用いた計量テキスト分析を行った。実習記録については, 自分の書いた記録を担当教諭の指導案を見ながら振り返ることで保育者がどのようなことを考えて保育していたかどのような意図をもって保育していたかを知る機会となる面からも効果があった。また, 実習記録とエピソード記録を書く経験から学生の記録の視点の違いが明らかになった。複数の種類の記録を作成することで学生の保育や子ども理解が深まると考える。また, 今回の演習の中で取り入れたグループディスカッションから, 自分とグループメンバーとの考えの違いから新たな視点や保育観・こども観の構築につながった。その一方でグループのメンバーによりディスカッションの質に差があることが, グループへの巡回の際に感じられた。学生のグループの人数や討論の柱など効果的なグループディスカッションとなるように今後やり方を検討したい。最後に, プレ実習が延期になってしまったことで実際に実習を経験できなかった残念さや不安感を感じた学生もいる。今後ボランティアなどの機会を作り解消できるような機会を提供したい。今回の代替演習に対する満足度はおおむね良好であり, プレ実習で目指すねらいは達成できたと思われる。しかし, この経験が2年次からの保育実習へどのように活用できたかについてはさらなる調査・分析が必要である。今後, さらに学生の学びの精査を図り, 効果が得られた内容については対面授業においても取り入れていきたい。今後の状況はまだ見通せない。これからの対面と遠隔を利用したハイブリット型授業へも対応していく必要があるだろう。ICTを利用した授業展開についての知見を蓄積し, プレ実習の授業方法や内容について充実を目指したい。

謝 辞

代替演習の教材の準備には, 保育現場の皆様のご理解とご協力なしでは実施できませんでした。保育動画を提供いただきました相山女学園大学教育学部教授齋藤善郎先生, 相山女学園大学附属幼稚園, 園内研修において保育を撮影させていただき機会をいただいたH幼稚園の皆様のおかげで学生にとって学びの多い代替演習となりました。また, 本稿の執筆にあたって温かく見守り, 叱咤激励していただきました野崎健太郎先生。すべての皆様へここに記し深く感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 厚生労働省令 子ども家庭局保育課(2020年3月2日付・6月15日付 事務連絡) 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について

- 2) 文部科学省 (2020年4月3日付・5月1日付・8月11日付)「令和2年度における教育実習の実施期間の弾力化について (通知)」
- 3) 保育士養成研究所 (2020) 新型コロナウイルス感染症への対応に関わる本会会員校の実態の調査
- 4) 保育士養成研究所 (2021) 新型コロナウイルス感染症への対応に関わる本会会員校の第2回実態調査結果
- 5) 伊藤一統 (研究代表者) (2021) 令和2年度一般社団法人全国保育士養成協議会学術研究助成課題研究「新型コロナウイルス拡散防止対応に迫られた状況下での実習運営対応に関する調査研究」研究報告書
- 6) 堀由里・小嶋玲子・野口啓子・金子晃之 (2021) 新型コロナウイルス感染症対策に伴う保育実習学内プログラムの作成と課題. 桜花学園大学保育学部研究紀要, 23, 191-199
- 7) 角野雅彦・関山均・西谷憲明・福島豪・上谷裕子・古村溝 (2021) 令和2年度保育実習Ⅱ及び保育実習Ⅲ 学内実習の取り組みについて. 鹿児島国際大学福祉社会学部論集, 40(1), 25-36
- 8) 三好伸子・連桃季恵 (2021) コロナ禍の遠隔授業と学内演習による保育実習の報告. 金沢星稜大学人間科学研究, 15(1), 41-50
- 9) 野津直樹・内山絵美子・中山貴太 (2021) 新型コロナウイルス感染症流行下における教育実習における学びを保障するための教育プログラム開発について. 小田原短期大学研究紀要, 51, 45-57
- 10) 児玉珠美・太田美鈴・井手裕子・谷村和秀・服部壮一郎・山本辰典 (2021) 学内保育実習のあり方に関する実践研究. 愛知学泉大学紀要, 3(2), 147-155
- 11) 川俣沙織・山下雅佳実・櫻井裕介・永瀨美香子・井上智史 (2021) 学外実習の代替となる学内実習の概要と展開: ICTを活用した保育現場との協働による学内実習プログラムの構築. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 53, 157-165
- 12) 板倉史郎 (2020) 実習指導におけるICT活用の取組と可能性: コロナ禍の対応を出発点に. 大阪千代田短期大学紀要, 50, 74-85
- 13) 高橋一夫・山口香織・北野富美子 (2021) 保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察(4): 新型コロナウイルス感染症対策下における実習指導の在り方について. 神戸親和女子大学 教職課程・実習支援センター研究年報, 4, 75-86
- 14) 三宅一恵・児子千鶴子・湯澤美紀・池田尚子 (2021) コロナ禍における幼稚園教育実習事前指導の実際: ハイブリッド型授業の展開と省察. ノートルダム清心女子大学紀要, 人間生活学・児童学・食品栄養学編, 45(1), 81-93
- 15) 志濃原亜美・大熊美佳子・三好力・浅井拓久也・北澤明子・鳥海弘子・関維子 (2021) 災害時における保育実習・教育実習内容の一考察—新型コロナウイルス感染拡大防止下の実習に関する対応—. 秋草学園短期大学紀要, 37, 208-221
- 16) 樋口紘一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析【第2版】内容分析の継承と発展を目指して, 「KH Coder3. Beta.04a」は, <http://khc.sourceforge.net/> から入手できる。
- 17) 三吉愛子・川俣美砂子 (2021) 幼稚園教育要領における領域「人間関係」の変遷—計量テキスト分析による比較を通して—. 広島国際大学総合教育センター紀要 (5), 31-52, 2021-03
- 18) 畑野裕子・大竹留美 (2020) 保育内容「環境」の研究動向に関する一考察: CiNii 掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて. 神戸親和女子大学児童教育学研究, 39, 193-205
- 19) 森巧・若月芳浩 (2021) 中堅教諭・熟練教諭が捉えるインクルーシブ保育について: フォーカスグループインタビューの調査から. こども教育宝仙大学紀要, 12, 29-36
- 20) 長屋佐和子・小河妙子・鎌水秀和 (2020) 保育者の絵本読み聞かせに関連する要因の抽出. 常葉大学教育学部紀要, 40, 179-192
- 21) 高橋一夫・山口香織・北野富美子 (2020) 保育者養成における模擬保育の意義に関する一考察(3). 神戸親和女子大学 教職課程・実習支援センター研究年報, 3, 117-128
- 22) 小野隆・清水寛子・岡田繁雄・岡田ひろみ (2020) 認定こども園・保育所職員オンライン研修の効果—講座振り返りコメントのテキストマイニング分析から—. 柳城こども学研究, 4, 1-6
- 23) 阿部真弓・高向山・海野展由 (2020) 保育実習での評価の傾向に関する研究: テキストマイニング分析による頻出語の可視化の試み. 常葉大学健康プロデュース学部雑誌, 14(1), 63-69
- 24) 全国保育士養成協議会中部ブロック協議会 (2021) 2021年度全国保育士養成協議会中部ブロック第24回セミナー実施要項